

忠義

芥川龍之介



板倉修理は、病後の疲労が稍恢復すると同時に、はげしい神経衰弱に襲われた。――

肩がはる。頭痛がする。日頃好んでする書見にさえ、身がはいらない。廊下を通る人の足音とか、家中の者の話声とかが聞えただけで、すぐ注意が擾されてしまう。それがだんだん嵩じて来ると、今度は極些細な刺戟からも、絶えず神経を虐まれるような姿になった。

第一、蓑盆の蒔絵などが、黒地に金の唐草を這わせていると、その細い蔓や葉がどうも気になって仕方がない。そのほか象牙の箸とか、青銅の火箸とか云う先の尖った物を見ても、やはり不安になって来る。しまいには、畳の縁の交叉した角や、天井の四隅までが、丁度刃物を見つめている時のような切ない神経の緊張を、感じさせるようになった。

修理は、止むを得ず、毎日陰気な顔をして、じつと居間にいすくまっていた。何をどうするのも苦しい。出来る事なら、このまま存在の意識もなくなし

てしまいたいと思う事が、度々ある。が、それは、ささく、れた、神経の方で、許さない。彼は、蟻地獄に落ちた蟻のような、いら立たしい心で、彼の周囲を見まわした。しかも、そこにあるのは、彼の心もちに何の理解もない、徒に万一を惧れている「譜代の臣」ばかりである。「己は苦しんでいる。が、誰も己の苦しみを察してくれるものがない。」――そう思う事が、既に彼には一倍の苦痛であった。

修理の神経衰弱は、この周囲の無理解のために、一層昂進の度を早めたらしい。彼は、事毎に興奮した。隣屋敷まで聞えそうな声で、わめき立てた事も一再ではない。刀架の刀に手のかかった事も、度々ある。そう云う時の彼はほとんど誰の眼にも、別人のようになつてしまう。ふだん黄いろく肉の落ちた顔が、どここと云う事なく瘡爛して眼の色まで妙に殺気立って来る。そうして、発作が甚しくなると、必ず左右の鬢の毛を、ふるえる両手で、かきむしり始める。――近習の者は、皆この鬢をむしるのを、彼の逆上した索引にした。そう云う時には、互に警め合つて、誰も彼の側へ近づくものがない。

発狂——こう云う怖れは、修理自身にもあつた。

周囲が、それを感じていたのは云うまでもない。修理は勿論、この周囲の持つている怖れには反感を抱いている。しかし彼自身の感ずる怖れには、始めから反抗のしようがない。彼は、発作が止んで、前よりも一層幽鬱な心が重く頭を圧して来ると、時としてこの怖れが、稲妻のように、己を脅かすのを意識した。そうして、同時にまた、そう云う怖れを抱くことが、既に発狂の予告のような、不吉な不安にさえ、襲われた。「発狂したらどうする。」

——そう思うと、彼は、俄にわかに眼の前が、暗くなるような心もちがした。

勿論この怖れは、一方絶えず、外界の刺戟から来るいら立たしさに、かき消された。が、そのいら立たしさがまた、他方では、ややもすると、この怖れを眼ざめさせた。——云わば、修理の心は、自分の尾を追いかける猫のように、休みなく、不安から不安へと、廻転していたのである。

修理のこの逆上は、少からず一家中の憂慮する所となつた。中でも、これがために最も心を勞したのは、家老の前島林右衛門である。

林右衛門は、家老と云つても、実は本家の板倉式部いたくらしきぶから、附人として来ているので、修理も彼には、日頃から一目置いていた。これはほとんど病苦と云うものの経験のない、赭あから顔の大男で、文武の両道に秀ひいでている点では、家中の侍で、彼の右に出るものは、幾人もない。そう云う関係上、彼はこれまで、始終修理に対して、意見番の役を勤めていた。彼が「板倉家の大久保彦左」などと呼ばれていたのも、完まくこの忠諫を進める所から来た渾名あだなである。

林右衛門は、修理の逆上が見えて、進み出して以来、夜の目も寝ないくらい、主家のために、心を煩わづわした。——既に病気が本復した以上、修理は近日中に病緩の御礼として、登城しなければならぬ筈である。所が、この逆上では、登城の際、附合つきあの諸大名、座席同列の旗本仲間へ、どんな無礼を働

くか知れたものではない。万一それから刃傷沙汰にでもなつた日には、板倉家七千石は、そのまま「お取りつぶし」になつてしまふ。殷鑑は遠からず、堀田稻葉の喧嘩にあるではないか。

林右衛門は、こう思うと、居ても立つても、いられないような心もちがした。しかし彼に云わせる、と、逆上は「体の病」ではない。全く「心の病」である——彼はそこで、放肆を諫めたり、奢侈を諫めたりすると同じように、敢然として、修理の神経衰弱を諫めようとした。

だから、林右衛門は、爾来、機会さえあれば修理に苦諫を進めた。が、修理の逆上は、少しも鎮まるけはいがない。寧ろ、諫めれば諫めるほど、焦れば焦れるほど、眼に見えて、進んで来る。現に一度などは、危く林右衛門を手討ちにさえ、しようとした。「主を主とも思わぬ奴じや。本家の手前さえなくば、切つてすてようものを。」——そう云う修理の眼の中にあつたものは、既に怒りばかりではない。林右衛門は、そこに、また消し難い憎しみの色をも、読んだのである。

その中に、主従の間に纏綿する感情は、林右衛門の重ねる苦諫に従つて、いつとなく荒んで来た。と云うのは、独り修理が林右衛門を憎むようになったと云うばかりではない。林右衛門の心にもまた、知らず知らず、修理に対する憎しみが、芽をふいて来た事を云うのである。勿論、彼は、この憎しみを意識してはいなかつた。少くとも、最後の一刻を除いて、修理に対する彼の忠心は、終始変らないものと信じていた。「君君為らざれば、臣臣為らず」——これは孟子の「道」だつたばかりではない。その後には、人間の自然の「道」がある。しかし、林右衛門は、それを認めようとしなかつた。……

彼は、飽くまでも、臣節を尽そうとした。が、苦諫の効がない事は、既に苦い経験を嘗めている。そこで、彼は、今まで胸中に秘していた、最後の手段に訴える覚悟をした。最後の手段と云うのは、ほかでもない。修理を押し込め隠居にして、板倉一族の中から養子をむかえようと云うのである。——

何よりもまず、「家」である。(林右衛門はこう思つた。) 当主は「家」の前に、犠牲にしなければ

ならない。ことに、板倉本家は、乃祖板倉四郎左衛門勝重かつしげ以来、未嘗いまだかつて、瑕瑾かさきんを受けた事のない名家である。二代又左衛門重宗しげもねが、父の跡をうけて、所司代しよしだいとして令聞れいぶんがあつたのは、数えるまでもない。その弟の主水重昌もんどしげまさは、慶長十九年大阪冬の陣の和が構こうぜられた時に、判元見届はんもとみとどけの重任かたじけなを辱かたじけなくしたのを始めとして、寛永十四年島原の乱に際しては西国さいごくの軍に將として、將軍家御名代ごみょうだいの旗を、天草征伐の陣中に翻ひるがえした。その名家に、万一汚辱ごうじやくを蒙あまらせるような事があつたならば、どうしよう。臣子の分として、九原きゅうげんの下、板倉家累代いらいだいの父祖に見ゆべき顔は、どこにもない。

こう思つた林右衛門は、私ひそかに一族うちの中を物色ぶつしやくした。すると幸い、当時若年寄を勤めてゐる板倉佐渡守さどのかみには、部屋住へやずみの子息が三人ある。その子息の一人を跡目あとめにして、養子願やしんさえすれば、公辺こうへんの首尾くびびは、どうにでもなろう。もつともこれは、事件の性質上修理や修理の内室には、密々で行わなければならぬ。彼は、ここまで思案をめぐらした時に、始めて、明るみへ出たような心もちがした。そうして、

それと同時に今までに覚えなかつたある悲しみが、おのずからその心もちを曇らせようとするのが、感じられた。「皆御家のためじゃ。」——そう云う彼の決心の中には、彼自身臙おぼろげにしか意識しない、何ものかを弁護べんごしようとするある努力が、月の暈かきのようにならなく、つきまといつていたからである。

病弱な修理は、第一に、林右衛門の頑健な体を憎んだ。それから、本家の附人つけびととして、彼が陰いんに持つてゐる権柄けんべいを憎んだ。最後に、彼の「家」を中心とする忠義を憎んだ。「主しやうを主しやうとも思わぬ奴やつじゃ。」——こう云う修理の語うちの中には、これらの憎しみが、燻くすぶりながら燃える火のように、暗い焰えんを蔵かくしていたのである。

そこへ、突然、思いがけない非謀ひぼうが、内室ないしつの口によつて伝えられた。林右衛門は修理を押し込め隠居いんごにして、板倉佐渡守の子息を養子に迎えようとする。

それが、偶然、内室の耳へ洩れた。——これを聞いた修理が、眦を裂いて憤つたのは無理もない。

成程、林右衛門は、板倉家を大事に思うかも知れない。が、忠義と云うものは現在仕えている主人を蔑ないがしろにしてまでも、「家」のために計るべきものであらうか。しかも、林右衛門の「家」を憂うれえるのは、杞憂きゆうと云えば杞憂である。彼はその杞憂のために、自分を押込め隠居にしようとした。あるいはその物々しい忠義呼よほわりの後に、あわよくば、家を横領しようとする野心でもあるのかも知れない。——そう思うと修理は、どんな酷刑こつけいでも、この不臣おこなひの行を罰するには、軽すぎるように思われた。

彼は、内室からこの話を聞くと、すぐに、以前彼の乳人めのとを勤めていた、田中宇左衛門という老人を呼んで、こう言った。

「林右衛門めを縛り首にせい。」

宇左衛門は、半白の頭を傾けた。年よりもふけた、彼の顔は、この頃の心労で一層皺を増している。

——林右衛門の企ては、彼も快くは思っていない。が、何と云つても相手は本家からの附人である。

「縛り首は穩便おんびんでございますまい。武士らしく切腹でも申しつけますならば、格別でございませうが。」

修理はこれを聞くと、嘲笑あざわらうような眼で、宇左衛門を見た。そうして、二三度強く頭を振つた。

「いや人でなし奴めに、切腹を申しつける廉かどはない。縛り首にせい。縛り首にじゃ。」

が、そう云いながら、どうしたのか、彼は、血の色のない頬ほおへ、はらはらと涙を落した。そうして、それから——いつものように両手で、鬢びんの毛をかきむしり始めた。

縛り首にしろと云う命が出た事は、直に腹心の近習きんじゆから、林右衛門に伝えられた。

「よいわ。この上は、林右衛門も意地いぢづくじや。手を拱こまいて縛り首もうたれまい。」

彼は昂然として、こう云つた。そうして、今まで彼につきまといつていた得體えたいの知れない不安が、この

沙汰を聞くと同時に、跡方なく消えてしまうのを意識した。今の彼の心にあるものは、修理に対するあからさまな憎しみである。もう修理は、彼にとつて、主人ではない。その修理を憎むのに、何の憚る所があるろう。——彼の心の明るくなつたのは、無意識ながら、全く彼がこう云う論理を、刹那の間に認めたからである。

そこで、彼は、妻子家来を引き具して、白昼、修理の屋敷を立ち退いた。作法通り、立ち退き先の所書きは、座敷の壁に貼つてある。槍も、林右衛門自ら、小腋にして、先に立つた。武具を担つたり、足弱を扶けたりしている若党草履取を加えても、一行の人数は、漸く十人にすぎない。それが、とり乱した気色もなく、つれ立つて、門を出た。

延享四年三月の末である。門の外では、生暖い風が、桜の花と砂埃とを、一つに武者窓へふきつけている。林右衛門は、その風の中に立つて、もう一応、往來の右左を見廻した。そうして、それから槍で、一同に左へ行くと相図をした。

林右衛門の立ち退いた後は、田中宇左衛門が代つて、家老を勤めた。彼は乳人をしていた關係上、修理を見る眼が、自らほかの家来とはちがつている。彼は親のような心もちで、修理の逆上をいたわつた。修理もまた、彼にだけは、比較的従順に振舞つたらしい。そこで、主従の關係は、林右衛門のいた時から見ると、遙に滑になつて来た。

宇左衛門は、修理の発作が、夏が来ると共に、漸く怠り出したのを喜んだ。彼も万一修理が殿中で無礼を働きはしないかと云う事を、惧れない訳ではない。が、林右衛門は、それを「家」に関する大事として、惧れた。併し、彼は、それを「主」に関する大事として惧れたのである。

勿論、「家」と云う事も、彼の念頭には上つていた。が、變があるにしてもそれは単に、「家」を亡すが故に、大事なのではない。「主」をして、「家」を亡さしむるが故に——「主」をして、不孝の名を負わしむるが故に、大事なのである。では、その大事

を未然に防ぐには、どうしたら、いいであろうか。この点になると、宇左衛門は林右衛門ほど明瞭な、意見を持つていないようであつた。恐らく彼は、神明の加護と自分の赤誠とで、修理の逆上の鎮まるように祈るよりほかは、なかつたのであろう。

その年の八月一日、徳川幕府では、所謂八朔の儀式を行う日に、修理は病後初めての出仕をした。そうして、その序に、当時西丸にいた、若年寄の板倉佐渡守を訪うて、帰宅した。が、別に殿中では、何も粗劣をしなかつたらしい。宇左衛門は、始めて、愁眉を開く事が出来るような心もちがした。

しかし、彼の悦びは、その日一日だけでも、続かなかつた。夜になると間もなく、板倉佐渡守から急な使があつて、早速来るようにと云う沙汰が、凶兆のように彼を脅したからである。夜陰に及んで、突然召しを受ける。——そう云う事は、林右衛門の代から、まだ一度も聞いた事がない。しかも今日は、初めて修理が登城をした日である。——宇左衛門は、

不吉な予感に襲われながら、慌しく佐渡守の屋敷へ参候した。

すると、果して、修理が佐渡守に無礼の振舞があつたと云う話である。——今日出仕を終つてから、修理は、白帷子に長上下のまま、西丸の佐渡守を訪れた。見た所、顔色もすぐれないようだから、あるいはまだ快癒がはかばかしくないのかと思つたが、話して見ると、格別、病人らしい容子もない。そこで安心して、暫く世間話をしていの中に、偶然、佐渡守が、いつものように前島林右衛門の安否を訊ねた。すると、修理は急に顔を暗くして、「林右衛門めは、先頃、手前屋敷を駈落ち致してござる。」と云う。林右衛門が、どう云う人間かと云う事は、佐渡守もよく知つている。何か仔細がなくては、妄に主家を駈落ちなどする男ではない。こう思つたから、佐渡守は、その仔細を尋ねると同時に、本家からの附人にどう云う間違いが起つても、親類中へ相談なり、知らせなりしないのは、穩でない旨を忠告した。ところが、修理は、これを聞くと、眼の色を変えながら、刀の柄へ手をかけて、「佐渡守殿は、別して、林右衛門めを鼻根にせられるようござるが、手前家来の仕置は、不肖ながら

手前一存で取計らい申す。如何に当時出頭の若年寄でも、いらぬ世話はお置きなされい。」と云う口上である。そこでさすがの佐渡守も、あまりの事に呆れ返つて、御用繁多を幸に、早速その場を外してしまつた。――

「よいか。」ここまで話して来て、佐渡守は、今更のように、苦い顔をした。

――第一に、林右衛門の立ち退いた趣を、一門衆へ通達しないのは、宇左衛門の罪である。第二に、まだ逆上の気味のある修理を、登城させたのも、やはり彼の責を免れない。佐渡守だったから、いいが、もし今日のような雑言を、列座の大名衆にでも云つたとしたら、板倉家七千石は、忽ち、改易になつてしまふ。――

「そこでじゃ。今後は必ずとも、他出無用に致すように、別して、出仕登城の儀は、その方より、堅くさし止むるがよい。」

佐渡守は、こう云つて、じろりと宇左衛門を見た。

「唯だ主につれて、その方まで逆上しそうなのが、心配じゃ。よいか。きつと申しつけたぞ。」

宇左衛門は眉をひそめながら、思切つた声で答へた。

「よろしゅうござりまする、しかと向後は慎むでございましょう。」

「おお、二度と過をせぬのが、何よりじゃ。」

佐渡守は、吐き出すように、こう云つた。

「その儀は、宇左衛門、一命にかけて、承知仕りました。」

彼は、眼に涙をためながら懇願するように、佐渡守を見た。が、その眼の中には、哀憐を請う情と共に、犯し難い決心の色が、浮んでゐる。――必ず修理の他出を、禁ずる事が出来ると云う決心ではない。禁ずる事が出来なかつたら、どうすると云う、決心である。

佐渡守は、これを見ると、また顔をしかめながら、面倒臭そうに、横を向いた。

「主」の意に従えば、「家」が危い。「家」を立てよう
とすれば、「主」の意に悖る事になる。嘗は、林右衛
門も、この苦境に陥つていた。が、彼には「家」の
ために「主」を捨てる勇氣がある。と云うよりは、
むしろ、始からそれほど「主」を大事に思つていな
い。だから、彼は、容易く、「家」のために「主」を
犠牲にした。

しかし、自分には、それが出来ない。自分は、「家」
の利害だけを計るには、余りに「主」に親しみす
ぎている。「家」のために、ただ、「家」と云う名の
ために、どうして、現在の「主」を無理に隠居など
させられよう。自分の眼から見れば、今の修理も、
破魔弓こそ持たないものの、幼少の修理と変りがな
い。自分が絵解きをした絵本、自分が手をとつて
習わせた難波津の歌、それから、自分が尾をつけた
紙鳶——そう云う物も、まぎまぎと、自分の記憶に
残っている。……

そうかと云つて、「主」をそのままにして置けば、
独り「家」が亡びるだけではない。「主」自身にも
凶事が起りそうである。利害の打算から云えば、林

右衛門のとつた策は、唯一の、そうしてまた、最も
賢明なものに相違ない。自分も、それは認めてい
る。その癖、それが、自分には、どうしても実行す
る事が出来ないのである。

遠くで稻妻のする空の下を、修理の屋敷へ帰りな
がら、宇左衛門は悄然と腕を組んで、こんな事を何
度となく胸の中で繰り返した。

修理は、翌日、宇左衛門から、佐渡守の云い渡し
た一部始終を聞くと、忽ち顔を曇らせた。が、それ
ぎりで、格別いつものように、とり上せる気色もな
い。宇左衛門は、気づかないながら、幾分か安堵して、
その日はそのまま、下つて来た。

それから、かれこれ十日ばかりの間、修理は、居
間にとじこもつて、毎日ぼんやり考え事に耽つてい
た。宇左衛門の顔を見ても、口を利かない。いや、
ただ一度、小雨のふる日に、時鳥の啼く声を聞いて、

「あれは鶯の巢をぬすむそうじやな。」とつぶやいた事がある。その時でさえ、宇左衛門が、それを潮しほに、話しかけたが、彼は、また黙つて、うす暗い空へ眼をやつてしまった。そのほかは、勿論、唾わしのようふすまじょうじに口をつぐんで、じつと襖障子を見つめてゐる。顔には、何の感情も浮んでいない。

所が、ある夜、十五日の総出仕が二三日の中に迫つた時の事である。修理は突然宇左衛門をよびよせて、人払いの上、陰気な顔をしながら、こんな事を云つた。

「先達せんたつて、佐渡殿も云われた通り、この病体では、とても御奉公は覚束おぼつかないようじや。ついては、身共もいつそ隠居しようかと思う。」

宇左衛門は、ためらつた。これが本心なら、元よりこれに越した事はないが、どうして、修理はそれほど容易に、家督を譲る気になれたのであろう。

「御尤ごつともでございます。佐渡守様もあのように、仰せられますからは、残念ながら、そうなさるよりほかはございませぬ。が、まず一応は、御一門衆へ

も……」

「いや、いや、隠居の儀なら、林右衛門の成敗とは變つて、相談せずとも、一門衆は同意の筈じや。」

修理、こう云つて、苦々にがにがしげに、微笑した。

「さようでもございませぬ。」

宇左衛門は、傷いたましそうな顔をして、修理を見た。が、相手は、さらに耳へ入れる容子ようすもない。

「さて、隠居すれば、出仕しようと思つても出仕する事は出来ぬ。されば、」修理はじつと宇左衛門の顔を見ながら、一句一句、重みを量はかるように、「その前に、今一度出仕して、西丸の大御所様（吉宗）へ、御目通りがしたい。どうじや。十五日に、登城とじょうさせてはくれまいか。」

宇左衛門は、黙つて、眉をひそめた。

「それも、たつた一度じや。」

「恐れながら、その儀ばかりは。」

「いかぬか。」

二人は、顔を見合せながら、黙つた。しんとした部屋の中には、油を吸う燈心の音よりほかに、聞えるものはない。——宇左衛門は、この暫くの間を、

一年のように長く感じた。佐渡守へ云い切った手前、それを修理に許しては自分の武士がたたないからである。

「佐渡殿の云われた事は、承知の上での頼みじゃ。」
ほどを経て、修理が云った。

「登城を許せば、その方が、一門衆の不興をうける事も、修理は、よう存じているが、思うて見い。修理は一門衆はもとより、家来にも見離された乱心者じゃ。」

そう云いながら、彼の声は、次第に感動のふるえを帯びて来た。見れば、眼も涙ぐんでいる。

「世の嘲りはうける。家督は人の手に渡す。天道の光さえ、修理にはささぬかと思うような身の上げや。その修理が、今生の望にただ一度、出仕したいと云う、それをこぼむような宇左衛門ではあるまい。宇左衛門なら、この修理を、あわれとこそ思え、憎いとは思わぬ筈じゃ。修理は、宇左衛門を親とも思う。兄弟とも思う。親兄弟よりも、猶更なつかしいものと思う。広い世界に、修理がたのみに思ふのは、ただその方一人きりじゃ。さればこそ、無

理な頼みもする。が、これも決して、一生に二度とは云わぬ。ただ、今度一度だけじゃ。宇左衛門、どうかこの心を察してくれい。どうかこの無理を許してくれい。これ、この通りじゃ。」

彼は、家老の前へ両手をつけて、涙を落しながら、額を畳へつけようとした。宇左衛門は、感動した。額を畳へつけようとした。宇左衛門は、感動した。「御手をおあげ下さいまし。御手をおあげ下さいまし。勿体のうございます。」

彼は、修理の手をとって、無理に畳から離させた。そうして泣いた。すると、泣くに従って、彼の心には次第にある安心が、溢れるともなく、溢れて来る。——彼は涙の中に、佐渡守の前で云い切った語を、再びありありと思い浮べた。

「よろしゅうございます。佐渡守様が何とおっしゃりましようとも、万一の場合には、宇左衛門臍腹を仕れば、すむ事でございます。私一人の粗忽にして、きつと御登城おさせ申しましょう。」

これを聞くと、修理の顔は、急に別人の如く喜びにかがやいた。その変り方には、役者のような巧みさがある。がまた、役者にならないような自然さも

ある。——彼は、突然調子の外れた笑い声を洩らした。

「おお、許してくれるか。忝い。忝いぞよ。」

そう云つて、彼は嬉しそうに、左右を顧みた。

「皆のもの、よう聞け。宇左衛門は、登城を許してくれたぞ。」

人払いをした居間には、彼と宇左衛門のほかに誰もいない。皆のもの——宇左衛門は、気づかわしうに膝を進めて、行燈の火影に恐る恐る、修理の眼の中を窺つた。

三 刃傷

延享四年八月十五日の朝、五つ時過ぎに、修理は、殿中で、何の恩怨もない。肥後国熊本 of 城主、細川越中守宗教を殺害した。その顛末は、こうである。

細川家は、諸侯の中でも、すぐれて、武備に富んだ大名である。元姫君と云われた宗教の内室さえ、武芸の道には明かつた。まして宗教の嗜みに、疎な所などのあるべき筈はない。それが、「三齋の末なればこそ細川は、二歳に斬られ、五歳ことなる。」と諷われるような死を遂げたのは、完く時の運である。

そう云えば、細川家には、この凶変の起る前兆が、後になつて考えれば、幾つもあった。——第一に、その年三月中旬、品川伊佐羅子の上屋敷が、火事で焼けた。これは、邸内に妙見大菩薩があつて、その神前の水吹き石と云う石が、火災のある毎に水を吹くので、未嘗、焼けたと云う事のない屋敷である。第二に、五月上旬、門へ打つ守り札を、魚籃の愛染院から奉つたのを見ると、御武運長久御息災とある可き所に災の字が書いてない。これは、上野宿坊の院代へ問い合せた上、早速愛染院に書き直させた。第三に、八月上旬、屋敷の広間あたりから、夜な夜な大きな怪火が出て、芝の方へ飛んで行つたと云

う。

そのほか、八月十四日の昼には、天文に通じている家来の才木茂右衛門と云う男が目付へ来て、「明十五日は、殿の御身に大變があるかも知れませぬ。昨夜天文を見ますと、将星が落ちそうになつて居ります。どうか御慎み第一に、御他出なぞなさいませんよう。」と、こう云つた。目付は、元来余り天文なぞに信を措いていない。が、日頃この男の予言は、主人が尊敬しているので、取あえず近習の者に話して、その旨を越中守の耳へ入れた。そこで、十五日に催す能狂言とか、登城の歸りに客に行くとか云う事は、見合せる事になつたが、御奉公の一つと云う兼で、出仕だけは止めにならなかつたらしい。

それが、翌日になると、また不吉な前兆が、加わつた。——十五日には、いつも越中守自身、麻上下に着換えてから、八幡大菩薩に、神酒を備えるのが慣例になつてゐる。ところが、その日は、小姓の手から神酒を入れた瓶子を二つ、三宝へのせたまま受取つて、それを神前へ備えようとすると、どうした拍子か瓶子は二つとも倒れて、神酒が外へこぼれて

しまつた。その時は、さすがに一同、思わず顔色を変えたと云う事である。

翌日、越中守は登城すると、御坊主田代祐悦が供をして、まず、大広間へ通つた。が、やがて、大便を催したので、今度は御坊主黒木閑齋をつれて、湯呑み所際の廁へはいつて、用を足した。さて、廁を出て、うすぐらい手水所で手を洗つてみると突然後から、誰とも知れず、声をかけて、斬りつけたものがある。驚いて、振り返ると、その拍子にまた二の太刀が、すかさず肩間へ閃いた。そのために血が眼へはいつて、越中守は、相手の顔も見定める事が出来ない。相手は、そこへつけこんで、たたみかけ、たたみかけ、幾太刀となく浴せかけた。そうして、越中守がよろめきながら、とうとう、四の間の縁に仆れてしまうと、脇差をそこへ捨てたなり、慌ててどこか見えなくなつてしまつた。

ところが、伴をしていた黒木閑齋が、不意の大変に狼狽して、大広間の方へ逃げて行つたなり、これもどこかへ隠れてしまつたので、誰もこの刃傷を知るものがない。それを、暫くしてから、漸く本間定五郎と云う小拾人が、御番所から下部屋へ来る途中で発見した。そこで、すぐに御徒目付へ知らせる。御徒目付からは、御徒組頭久下善兵衛、御徒目付土田半右衛門、菰田仁右衛門、などが駈けつける。——殿中では忽ち、蜂の巣を破つたような騒動が出来た。

それから、一同集つて、手負いを抱きあげて見ると、顔も体も血まみれで誰とも更に見分ける事が出来ない。が、耳へ口をつけて呼ぶと、漸く微かな声で、「細川越中」と答えた。続いて、「相手はどなたでござる」と尋ねたが、「上下を着た男」と云う答えがあつただけで、その後は、もうこちらの声も通じないらしい。創は「首構七寸程、左肩六七寸ばかり、右肩五寸ばかり、左右手四五ヶ所、鼻上耳脇また頭に疵二三ヶ所、背中右の脇腹まで筋違に一尺五寸ばかり」である。そこで、当番御目付土屋長太郎、橋

本阿波守は勿論、大目付河野豊前守も立ち合つて、一まず手負いを、焚火の間へ昇ぎこんだ。そうしてそのまわりを小屏風で囲んで、五人の御坊主を附き添わせた上に、大広間詰の諸大名が、代る代る来て介抱した。中でも松平兵部少輔は、ここへ昇ぎこむ途中から、最も親切に働つたので、わき眼にも、情誼の篤さが忍ばれたさうである。

その間に、一方では老中若年寄衆へこの急変を届けた上で、万一のために、玄関先から大手まで、厳しく門々を打たせてしまつた。これを見た大手先の大小名の家来は、驚破、殿中に椿事があつたと云うので、立ち騒ぐ事が一通りでない。何度目付衆が出て、制しても、すぐまた、海嘯のように、押し返して来る。そこへ、殿中の混雑もまた、益々甚しくなり出した。これは御目付土屋長太郎が、御徒目付、火の番などを召し連れて、番所番所から勝手まで、根気よく刃傷の相手を探して歩いたが、どうしてもその「上下を着た男」を見つける事が出来なかつたからである。

すると、意外にも、相手は、これらの人々の眼に

はかからないで、かえつて宝井宗賀と云う御坊主のために、発見された。——宗賀は大胆な男で、これより先、一同のさがさないような場所場所を、独りでしらべて歩いていた。それがふと焚火の間の近くの廁の中を見ると、鬢の毛をかき乱した男が一人、影のように蹲っている。うす暗いので、はつきりわからぬが、どうやら鼻紙囊から鋏を出して、そのかき乱した鬢の毛を鋏んででもいるらしい。そこで宗賀は、側へよつて声をかけた。

「どなたでござる。」

「これは、人を殺したで、髪を切っているものでござる。」

男は、しわがれた声で、こう答えた。

もう疑う所はない。宗賀は、すぐに人を呼んで、この男を廁の中から、ひきずり出した。そうして、とりあえず、それを御徒目付の手に渡した。

御徒目付はまた、それを蘇鉄の間へつれて行って、大目付始め御目付衆立ち合ひの上で、刃傷の仔細を問ひ質した。が、男は、物々しい殿中の騒ぎを、茫然と眺めるばかりで、更に答えらしい答えを

しない。偶々口を開けば、ただ時鳥の事を云う。そうして、そのあい間には、血に染まった手で、何度となく、鬢の毛をかきむしった。——修理は既に、発狂していたのである。

細川越中守は、焚火の間で、息をひきとつた。が、大御所吉宗の内意を受けて、手負いと披露したまま駕籠で中の口から、平川口へ出て引きとらせた。公に死去の届が出たのは、二十一日の事である。

修理は、越中守が引きとつた後で、すぐに水野監物に預けられた。これも中の口から、平川口へ、青網をかけた駕籠で出たのである。駕籠のまわりは水野家の足軽が五十人、一様に新しい柿の帷子を着、新しい白の股引をはいて、新しい棒つきながら、警固した。——この行列は、監物の日頃不意に備える手配が、行きとどいていた証拠として、当時のほめ物になったそうである。

それから七日目の二十二日に、大目付石河土佐守（じょうし）が、上使に立った。上使の趣は、「其方儀乱心したとは申しながら、細川越中守手疵養生不相叶致死去候に付、水野監物宅にて切腹被申付者也」と云うのである。

修理は、上使の前で、短刀を法の如くさし出されたが、茫然と手を膝の上に重ねたまま、とろうとする気色（けしき）もない。そこで、介錯（かいしゃく）に立った水野の家来吉田弥三左衛門が、止むを得ず後からその首をうち落した。うち落したと云つても、喉の皮一重（ひとえ）はのこつている。弥三左衛門は、その首を手にとつて、下から検使の役人に見せた。頬骨（ほほほね）の高い、皮膚の黄ばんだ、いたいたしい首である。眼は勿論つぶつていない。

検使は、これを見ると、血のにおいを嗅（か）ぎながら、満足そうに、「見事」と声をかけた。

同日、田中宇左衛門は、板倉式部の屋敷で、縛り首に処せられた。これは「修理病氣に付、禁足申付候様にと屹度、板倉佐渡守兼ねて申渡置候処、自身の計らいにて登城させ候故、かかる凶事出来、七千石断絶に及び候段、言語道断の不屈者」という罪状である。

板倉周防守（すわののかみ）、同式部、同佐渡守、酒井左衛門尉、松平右近将監等の一族縁者が、遠慮を仰せつかったのは云うまでもない。そのほか、越中守を見捨てて逃げた黒木閑斎は、扶持を召上げられた上、追放になった。

修理の刃傷は、恐らく過失であらう。細川家の九曜の星と、板倉家の九曜の巴と衣類の紋所（もんじょう）が似ているために、修理は、佐渡守を刺（さ）そうとして、誤つて越中守を害したのである。以前、毛利主水正を、水野隼人正が斬つたのも、やはりこの人違いであつ

た。殊に、手水所ちゆうすいじょうのような、うす暗い所では、こう云う間違まちがいも、起りやすい。——これが当時の定評であつた。

が、板倉佐渡守だけは、この定評をよろこばない。彼は、この話が出ると、いつも苦々しげに、こう云つた。

「佐渡は、修理に刃傷されるような覚えは、毛頭もうとうない。まして、あの乱心者のした事ことじゃ。大方おおかた、何と云う事もなく、肥後侯を斬つたのであろう。人違などとは、迷惑至極な臆測おそじや。その証拠しやうこには、大目付の前へ出ても、修理は、時鳥ほじりがどうやら云うていたそうではないか。されば、時鳥ほじりじゃと思つて、斬つたのかも知れぬ。」

(大正六年二月)

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和 61）年 9 月 24 日第 1 刷発行

1995（平成 7）年 10 月 5 日第 13 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和 46）年 3 月～1971（昭和 46）年 11 月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号-86）を、大振りにつけています。

入力：j.utiyama

校正：かとうかおり

1998 年 12 月 6 日公開

2004 年 3 月 7 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。